

◆ 地域にとって必要な存在になれ ◆

6 月 9 日（木）に「建設経営者倶楽部 KKC 6 月例会」を開催しました。
その内容を報告いたします。



但馬牛が有名な兵庫県北部に位置する石井建材株式会社。今回は、代表取締役の仲村正彦氏にお話しいただいた。

1. 東日本大地震のボランティア

石井建材は 4 月中旬の 6 日間、宮城県石巻市へボランティアに向かった。「ゆっくり風呂に入りたい」という被災者の希望に応えるため風呂を作ったり、子どもと一緒に餅つきをしてつくたてのお餅を配ったり、現地の方に笑顔になってもらうための活動を行った。その活動を通して、メディアでは知り得なかった現地の問題を目の当たりにした。例えば、全国から送られた物資が、ある場所で山積みになっており、本当に物資を必要としている方に届けられていないことや、常に魚などの死骸の悪臭が漂っていることである。

2. 石井建材の経緯

創業者の石井鉄次氏（以下、会長）は、周囲から恐れられている存在で、話をする時は、謝りに行った経験しかない。しかし、その厳しさがあつたからこそ今の自分がある。いろいろなことを教えてもらい、今は厳しく育ててくださった会長への感謝の気持ちでいっぱいだ。[素晴らしい・厳しい・人間味あふれる] そんな人柄だった。機械に関しての知識が豊富で、独自の車両を考案するほどであった。

会長の教えに「コンクリートは寝てる間に硬くなる。型を組んだら絶対コンクリ打ってから帰れ」があり、コンクリートを打たないと帰れないことが当たり前だった。朝 6 時半から夜 9~10 時

で働く日々が続いた。

3. 異業種への進出と若者への働き場の提供

石井建材がある香美町は過疎化が進んでいて、それに伴い但馬牛を飼う農家が少なくなっている。そこで農家の方に「仲村さんのところで牛を飼ってくれないか」と頼まれた。異業種への進出に大いに悩んだが、会長の「地域にとって必要な存在になれ」という言葉に背中を押され引き受けることとなった。一から牛の飼育方法を熱心に学び、新規事業を始めるにいたった。12 頭の母牛の飼育からスタートし、将来の目標は 1,000 頭飼うことである。

新規事業に取り組んで嬉しかったことは、知的障害のある若者に、働く場を提供できたことだ。彼らは知的障害者というレッテルを貼られたことで、家に閉じこもって働けないでいる。「若者たちに、仕事を体験してほしい」という一心で、但馬牛の飼育を手伝ってもらうようになった。今までは機械を使い危険が伴う作業のため、職場体験を実現することができなかった。今では、働く条件を満たした人は正社員で採用している。前社長の石井敏夫氏より「やっとうこういうことができるようになったか」という言葉を聞きうれしく思った。

何か迷いが生じたとき、先代の教え・意思を思い出し、忠実に従っていくと良い方向へ向かっていく。いつも先代の存在を心に留めて行動している証である。時おり涙ぐんで熱く話す姿に、仲村社長の篤実な人柄がひしひしと伝わってきた。

■ 新規事業の発想法（土木工事と畜産業のコラボレーション）（仲村正彦氏 作）

（文責：市田 久美子）

| | MI（心） | BI（行動） | VI（表現） |
|--------------|---|--|---|
| ！ 着想 | 公共事業の激減 全員の幸せ | 社員の雇用確保 仕事が増減でのリストラは 決して行わない | 多面的な経営、仕事の確保 良い物を創る (安全な肉・米・野菜) |
| ? 連想 | 地域のお役に立つ (会社設備、ノウハウを活かした) 牛の増頭が必要 | 地域産業のリサーチ 新しい働ける場 雇用・レストラン・里山農園 | 県・町・農業振興（農林） 交渉での但馬牛の復興 絶対に失敗はさせられない |
| → ← 発想 | 土木工事のノウハウとの コラボレーション 自社保有の車・機械の利用 | 畜産技術、仕入れ、販売ノウハウの ルート確保と明確化 | 計画の立案と技術者の確保 教育育成プラン、牛舎の確保 (中学校の利用) |
| ○ 予想 | 地域の活性化と 従業員の幸せの実現 若い者の安住できる町にしたい | 資金の調達返済計画と 3 年間（販売）の資金繰り 教育訓練 地域とのコミュニケーション | 但馬牛を通じた地域の活性化と、 公共事業からの新しいビジネス モデルの構築 観光農園・温泉に入っている但馬牛、 ガラス張り・冷暖房完備の牛舎 (10 年後には、1,000 頭) 雇用 30 人 |